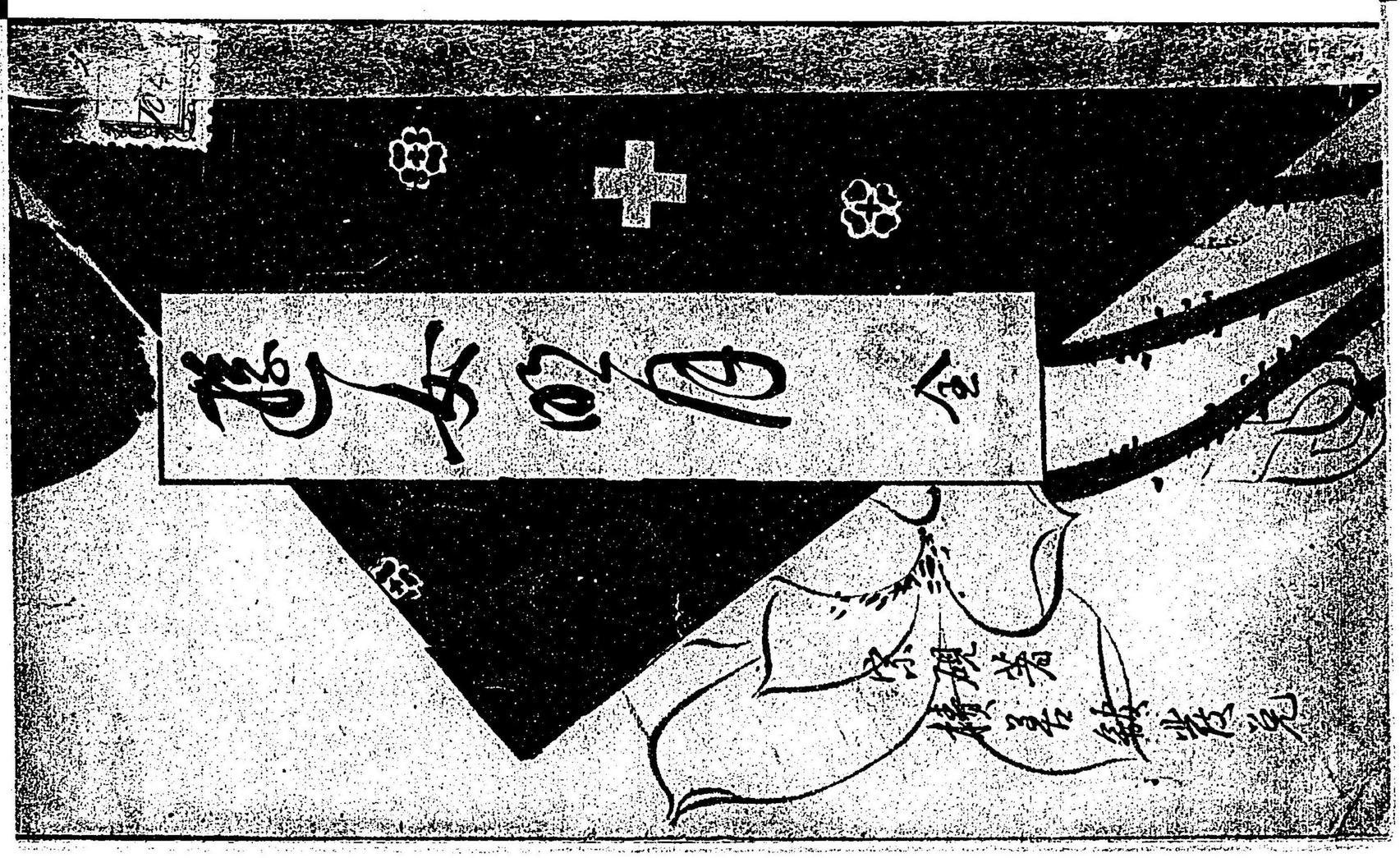
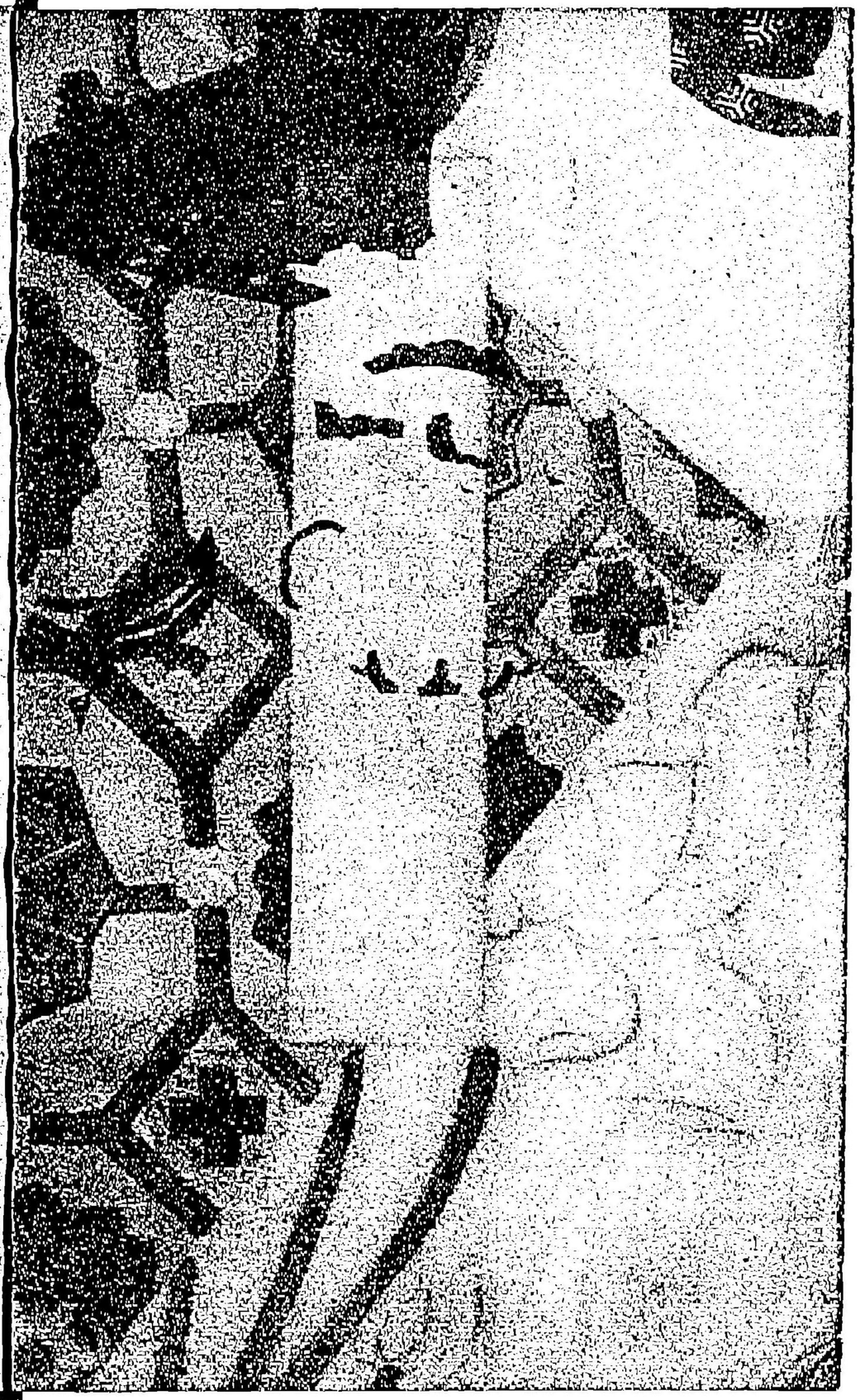


特51
54



はしがき

如来と呼れし七里恒順師の法話聞かは筆硯の間をぬすみて萬行寺に參し、そか月の碑文を讀みて感慨に堪へさるものちに禿筆執りて、覺束なくも三百餘年の様に書綴り、我か從事せる福岡日々新聞間もなく書肆積善館、草巷を訪れて、これと此儘梓に上せ、世の善女達に頒たんとの所望。三たひ四たひ謝絶したれとも、佛恩報謝の爲めとて聽入れす。

内務省図書之印

報謝と聞てはずけなうもてとわられす、さらは物になるかならさるか、最一度前から綴りかへてと、安請合ひに請合ひて、其夜一夜に書上けし一代記。早細工の割合には苦心なか〳〵籠り居れは句讀と便りに味はふて御一讀あれ。あはれ世の善女達！これも報謝の一つにてそ。

明治二十五辰年の夏

無筆菴のあるし　宗硯散士誌す

遊女明月

宗硯著

《一》

昔り永錄天正の頃及、筑前國博多の津柳町といへる遊廓に、薩摩屋（今の一國屋）といへる遊女屋ありし、當家の抱への明月と繁昌せる遊女い、其姿色萬人に勝れ、心狀優しくして絲竹の技にも通じ、實に城を傾ふくるの美人をこれなりと、當時九州掛けて隱れも

報謝と聞てはすげなうもこそわられす、さらは物になるかならさるか、最一度前から綴りかへてと、安請合ひに請合ひて、其夜一夜に書上けし一代記。早細工の割合には苦心なか〳〵籠り居れは句讀と便りに味はふて御一讀あれ。あはれ世の善女達！これも報謝の一つにこそ。

明治二十五辰年の夏

無筆菴のあるし　宗硯散士誌す

遊女明月

宗硯　著

《一》

今は昔〳〵永錄天正の頃及、筑前國博多の津柳町といへる遊廓に、薩摩屋(今の一國屋)といへる遊女屋あり、當家の抱への明月と繁昌せる遊女は、其姿色萬人に勝れ、心狀優〳〵くして絲竹の技にも通じ、實に城を傾ふくるの美人なりと、當時九州掛けて隱れも

なき大評判。

此の遊女天のなせる麗質の萬人に勝るのみかへ、坐ろに人を動かすの嬌容あるのみかへ、思想尋常一様ならざる所ありて、一たびこれに接する者へ、又別るゝことを知らざるの愛あり。

されば高きも卑きもおゝなべて、甲も乙も明月〳〵と珍重がり、突出〳〵から間もなく、引手茶多の流行妓とぞなりぬる。

昔〳〵より遊女といへば、客を口頭にあやなし

て、金銀拐り取るが第一の本務の如くなりて、十人の客にハ十色に仕へ、金ある人にハ命もと媚び諂らひ、金無き人は百足を軒下に棄るが如く、一昨日來よと言はぬばかりに投遣りて、顧みざるが大方の習慣なれど、薩摩屋の明月ハ、流石其名を後の世までも知らるゝ程、萬事の行ひ普通の遊女と異なり、高き卑き、若き老ひたる、貧〳〵きと富めるとを問ずず、苟にも己れを指名して來れる人と見る時ハ、喜び勇みて十色の人を一色に迎へ、縱

〜見るもいぶせき下司下人なればとて、嫌はず其が信切を懇ごろに謝〜て、扨別れ際になれば又繰返〜〜、已が仕へ方の不行届きをわび、其上身分高き人と見る時ハ、一層其身を謙退り、斯様な賤〜い身で、殊に不愛嬌の生質、お心に染ぬは知れてあれど、川竹の流れに沈む身ハ、親よりも兄弟よりもお客様が杖柱、慇懃と思召して重ねてお運びを待ちはべると、優〜の目もとに無量の愛を湛ヘて、喞つ如く訴ふる如く言はれ〜時には、平素

は鬼を挫ぐ勇將も、馬上に鎗を投棄て〜、縱〜敵に後ろを見するとも、其方に二言ハ使ふまじ、屹度最一度、二度、三度、來るといふたら八幡誓ふて通ふほどに、風引かぬやう待て居れと、手を取りて別れを惜む有樣、實や色は思案の外なりけり。

（二）

斯程までに酸いも甘いも咬分けて、勤め大事を忘れざる明月も、戀には曇る心の鏡、繁々と通ひ遊廓の客の中に、年の頃二十三四に〜

て、色飽くまで白く、目もと凜々〻く、口もと締り、中帶に黑羽二重の羽織〻とやかに着流し、臙脂に水色蛇腹の柄の間より、後藤の金獅子を透〻たる、小作りの一刀落〻差〻に差〻たるハ、誰が目にも由緒ある武家の若殿と見ゆる美男子、不圖〻たことより明月の許に通ひ初め、抑そもの初會より今日で五回も通ひ〻が、此人いかなる故にや、此里に蹈込みながら絶にて艶めきたる素振を見せず、只來れる度に面白き浮世話〻など持掛け、潔白

に遊びて潔白に別るゝ、彼方は戀知らずか、但〻男姿に裝らへて御座つても、本性ハ女なるかと、乾娘の甲乙が寄ると障ると眉皺よせて訝かるも無理ならず。

指名〻て呼れたる明月自身さへも、ほと〻心中を推〻兼、或時は氣の知れぬお方と恨みても見たなれど、熟々また思ひめぐらせば、昨夜も別れ際に彼樣仰せらるゝには、厚着ハ外見惡る〻など、素肌に長襦一枚、なるほど身輕に見にて一寸は意氣でよけれど、風

邪ハ萬病の基なれば、必らず〳〵薄着して風引てたもふな、親兄弟の無き身ハ、信切に介抱して呉れる者もあるまじ、兎角人間ハ息災延命が金なりとの御一言、十年も二十年も連添ひて良人でも、如彼まで信切にいふてハ呉れまじ、必竟妾愍然と思召せばこそ、あのやうな言葉も出るといふもの、して見れば今こそ如彼でも末ハ妾を根引きして……、こりやうれに極つたりと、獨り分別して獨り喜び、流石今までハ客に依りて待遇に厚薄の隔てな

かりし明月も、此人ゆゑにハ骨も肉も鎔る程迷ひ込み、別れて後は夢に幻しに、束の間も忘るゝ暇とてハ無りけり。

寢てハ夢覺めては現、雨につけ風につけ、彼樣戀しと面痩せる程焦るといへども、如何なる事情にや其人今ハ影だに見せず、若しや病氣の起りてか、左なくば妾が餘り戀ひ慕ふ素振に愛想盡きて、見向くも嫌になり給ひしか、あゝ樣子聞たや便り欲しやと、身悶えして明け暮れ待ちに待ちたりしが、相手は名にれ

ふ城下の住居、殊に親掛りの身にあれば傳言せんよすがもなく、溜息つく〳〵獨り思案に沈む打柄、明月どのおいでかと慌だしく部屋の戸開けて入來る乾娘、あたふた側に擦寄りて、お喜びなされ、豫ての御懇望首尾よく成就致しました、何を言はんす、じや〳〵と又此方さんの戯談ばかりと、聞流して横に向く明月の膝を両手で揺動りつゝ、乾娘へ手柄顔に身を寄せて、やれ〳〵やつとの事で今日彼様にめぐり逢ひ、船に積む程不

足の數々並べたれば、彼様聲を潜められて、明月がさほどまでに思ふて呉れる事の眞實僞りなくば、包みて詮なし、正直へ彼れが心中見ぬき〳〵上で、我れも友白髮を契らん心躰、さらば今夜を打解けて語らふほどに、萬事を頼むと、これ、此脊中をぽんと一つ、彼様を本氣じやぞへ。

（三）

再び又通ひ初め〳〵ほどに、豫てより骨も肉も溶るばかりに戀ひ焦れし〳〵明月が、血道あけて

の待遇に、旅て加へて就娘末者が魂限り取待つからに、件んの武士は忽ち綿のことくなりて迷ひ込み、今日も來る日も家を外なる遊興三昧、果てハ主君の御奉公さへ等閑になり、明け暮れ薩摩屋に耽り込みて、有頂天外に昇りつめ〳〵ぞ是非もなき、斯て日を經る内に、件んの武士ハ身持不行跡との評判立ちて、御殿奉公も出來ずなり、其上兩親よりハ嚴〳〵き勘當の言渡〳〵を受け、行き所なきまゝに豫て出入の八百屋の家に厄介となり、今までの

華美〳〵き衣服に引替へ、見るも氣の毒かる木綿衣纏ひて、八百屋の裏座敷に憂き月日を送り居〳〵が、遂に迷ひの夢覺めて、これハと心の附き〳〵秋、哀れや惡疾身に發〳〵て、敢果なき日陰の最期をぞ遂ける。

斯と聞く明月は身もよもあられず、泣て〳〵泣き明かせ〳〵が、扨て熟々思ひ廻らせば、世に遊女ほど罪深き者ハなし、本をたゞせば彼樣妾に打込み給ひ〳〵とは言ひながら、必竟我れから百倍の戀を持掛け〳〵故に、誰あらふ一

廉のお武家の若殿が、将來望みある身を持ちて、妾ゆえにあの零落、主君に捨てられ親にハ勘當、果てをのたれ死も同様のあの最期、嗚呼、これを思へば世の中に、我等風情の色香の爲めに生涯を誤る人ハ幾人ぞ、恐れても尚ほ恐れざる可らざるとかれど、去りとて一旦苦海に沈め〳〵身は、年期明かざる内ハ自儘勝手に引く譯にも行かず、……といふて此儘日を送れば、一日〳〵と業に業を重ぬるのみ、ハて如何にせば此の業因を脱るゝかと、一室

の内に立て籠り、頤を襟に差込みて、明月ハ又もや思案に沈み果てけり。

稍ありて明月ぶる〳〵と身震ひして、あゝ思へば懊惱の勤めよな、朝たに源氏の君に媚び、夕べに平家の殿に見へ、浮萍の所定めぬ仇夢よ、夜毎〳〵を送りし果てハ、あたら出世盛りの若殿を非人乞食とまで零落させの恐しさ、斯れば結局ハあらゆる怨恨の我身一つよ集まりて、未來ハ地獄の苦艱苦痛、此の儘佛果を得んこと所詮望むべくもあらざる

なり。

斯る考への湧く時には、此世よ頼みとするも

の佛の外には何物も無く、此業障深き身を持

ちながら此儘佛の助けを願ひくとて、所詮契

ふべき筈はなけれど、一遍の懺悔には百の罪

障も滅すると聞けば、至ぎ來く方の罪滅ぼく

は、是れより佛力の加護を頼むに如かずと、

思ひ立ちては中々に片時の猶豫もなり難く、

早速土地に名ある寺々を彼所此所と訪づれて、

罪滅ぼくの御法もがなと頼みてくが、行く

先々が悉とく皆眞宗の寺ならねば、何れにても言ひ合はせく如く、女人は佛法の器にあらずと卻ねられ、さらば如何なる艱苦も耐忍びて專念に修業致すべければと折返くて頼み出れば、既に佛法の器にあらざる女人は、素より修業などの出來べきものにあらずと菅も無う斥けられ、斯れば所詮佛力の加護よ依る事は恊はざるかと、途方に暮れてありける折柄、或人の來りて語れるは、頃日石山より歸山ありく、萬行寺の住持正海師といへるは、德

高く學博く世にも稀れなる善智識なりとの言に、明月は雀躍りして打喜び、これぞ我が平素の本懷を達するよ屈强の話しと、其日直ぐに傳手を求めて住持正海を萬行寺に訪つれ、其身の生れ合せの惡しきとより、これまで苦海に作りし罪障の數々計る立てゝ、心底から懺悔を爲し、扨改めて住持の前に兩手をつかへ、罪障消滅の爲めあはれ一遍の御說法給へれかしと、いとも殊勝に額つきけり。

（四）

住持正海は今しも明月が殊勝なる物語りに耳を傾け、暫しは默然たりしが、稍ありて膝を進め、斯へ近頃いみじき心掛けの女中かな、抑ろも眞宗の御敎は、蓮如上人の示し給へるが如く、れほよろ當流の信心を取るべきおもむきは、先づ我身は女人なれば、罪深き五障三從とてあさましき身にて、已に十方の如來も三世の諸佛にも捨てられたる女人なりけるを、かたしけなくも彌陀如來獨り斯る機を救へんと誓ひ給ひて、已に四十八願を起し給

へり、其中第十八の願に於て一切の惡人女人を助けたまへる上に、女人の罪深く疑ひの心深きに依りて、又重ねて第三十五の願を起し給へるなり、斯る彌陀如來の御苦勞ありつる御恩のかたじけなさよと、深く思ふべきなり、

との御言などを引きつゝ、安心のすがたを殘る隈なく說きて、懇ろに他力本願より女人往生の事まで哺めるやうに敎へければ、明月敎ハ立どころに他力往生の不思議を會得し、敎誨の有難さに思はず觀喜の涙を湛へ、平素の

本懷滿足の色を現はし、手の舞ひ足の蹈む所を知らざるほど打喜び、あゝこれにて心が清々しくなりまし た、これからは朝な夕な怠りなく參拜致しまして、佛恩報謝決して忘却仕つるまじと、其日ハ厚く禮を逃べて其儘別れたりしが、翌日よりは朝まだきに起出てゝ手づから井水汲來り、身躰殘る隈なく洗ひ清め、うれより珠數を手にして薩摩屋を立出で、餘所見もせず萬行寺に詣で、彌陀の御前ヨ拜伏していとも殊勝に稱名し、時ありては住

持に頼みて法話を聽聞し、若し又未明にして寺の門戸開けざる時は、門前の地上に拜伏し、懇ろに拜禮を遂げ、稱名の聲諸共に、薩摩屋指して罷り去りぬ。

爾來風雨寒暑の厭ひなく、朝な〳〵時を定めて萬行寺に通ふこと一年尚ほ一日の如し、去りながら普通の人間と異なり、素々苦海に沈める遊女の身にしあれば、遇たま流連の客などありて、如何ぞ心のみ焦せるとも參詣の暇を得ざるとあり、斯る時には豫ねて己が住

所より萬行寺までの步數二千八百四十步を計へ置き、時を斗りて庭前に下り立ち、彼所此所と其步數に滿る丈け步み、終りて又も地上に拜伏し遙拜するなど、其心躰の殊勝さ、遊女風情とは又あるまじき心掛けと聞く人賞めざるはなかりけり。

斯て天正六年明月廿二歲の春、不圖せしとより風邪の心地と打臥せしが、病氣次第〳〵に重り行き容易に本復すべくも思はれねば、薩摩屋の亭主は苦心一方ならず、醫者よ藥りと

様々に手を尽すと雖も其甲斐更にあらざるにぞ、亭主も今は腕を拱ぬき、大切の金の蔓をむざ〳〵棄てゝ仕舞ふとかと、途方に暮れて見へにけり

斯る病苦の中にも明月は心にゝ他力不思議の本願を味ひ口には佛恩報謝の稱名斷るとなく、

今しも亭主が枕邊に來りて様々に勞ゝる言葉を皆まで聞かず、親方様の一日も早く本復せよとの御信切、骨身に染みてお嬉しうゝ御座りますが、此度の病氣ゝ所詮本復覺束な

く、あゝ思へば今まで夥多のお客に媚諂らひ、作り〳〵罪の數を計ふれば、うら恐ろしき事ばかり、臨終は如何なる苦痛を見ることかと思ひ〳〵に、御法のれ庇に依て、苦痛といふと少しもなく、安心緩やかに極めて居りまする、これと申すも全たく如來様の御冥助で御座ります程に、必ず〳〵御心配下さりますな、信心の有難さには、斯様な病苦に罹りまして も、未來は成佛疑ひなしと思へば、妾は嬉しうて〳〵なりませぬ、豫てお仕持様より拜承

りたる佛の御言葉にも、　雖一世勤苦、須臾之項。後生無量壽佛國、快樂無窮。との御法、今こそ思ひ當つて一層尊とく覺へます、それに附けても今生のれ暇乞に、今一度れ寺へ……お寺へ……といひつゝ手を合〳〵て念佛唱ふれば、亭主も思ハず貰ひ泣き〳〵て、其堅固の信心ゆゑに、私も此樣よ涙を溢〳〵ます、あゝ、あゝ、佛法の功德は恐〳〵いものじやが、萬行寺樣のお庇も大〳〵たものじや、これ、明月や、萬行寺樣へは此私〳〵が代參〳〵て遣る程に、な

んにも案じるとはないと、流石の亨主も明月が信心の堅固なるに化せられて、涙かがらに合掌〳〵、平素のがみ〳〵聲に引替へいとも殊勝に、

南無阿彌陀佛、　南無阿彌陀佛。

（五）

人の一生に死ぬほど苦〳〵きものはなく、又死ぬほど恐ろ〳〵きことはなく、此苦〳〵きもの此恐ろ〳〵きことも、信心てふ堅固の覺悟出來たら人には、是れほど心安きものはあらじと、常日頃より住持正海の懇ろなる敎誨を心に

銘じたる明月、今は一命も覺束なきまで衰へしが、流石に他力の本願に一身を委ねし身は、露聊かも動ずる色なく、今日も病ひ篤しとの報知に依て、萬行寺よりは住持正海態々枕邊に訪れて、後生の大事ども說聞せつ、懇ろに病苦を勞へれば、明月は閉ぢたる眼をふッと見開き、蚊の鳴くやうな聲を出して、

「住持樣もうお別れ……又のお目もじは御淨土で御座ります、といふ聲聞て側に居並ぶ朋輩ども、やれ明月どのお心慥かにと一同膝

を進れば、はい、心はいつも大丈夫で御座んすが、所詮活られる身でもなし、今更言ふてお前さん方の氣を惡うするも如何なことなれど、斯ういふ商賣をする者は、明けても暮れても浮た話し浮た噂さばかりなれど、其浮た間を作る罪へ數知れず、殊に及びもない人に戀ひ焦れて、添れぬ緣に心を痛め、迷ひの種を蒔く上に、果ては色々のいきさつ出來て、此方の身が全たければ先方の身が滅び、先方が榮ゆれば此方の戀へ益ます募りて、あら

れもなき大望むら〳〵と萌し、流れの身の賤しきとも打忘れて、人様を惡るい暗路に誘ひ込み、遂には双方諸倒れ、あゝこれ程つまらぬことゝ御坐んせぬ、爾う〳〵て明け暮れ人様を欺き、惡道に導いた報いは、今生で潔白に消ゆるものでゝ御坐んせぬ、其の業因に引れ〳〵て未來ゝ地獄の苦痛苦難、彌陀が從苦入苦、從冥入冥。とお示し〳〵下され〳〵も此所の事、斯ういふたばかりでは御合點も行くまい程に、惡いことゝ申し〳〵ませぬ、明月が臨終

の遺言と思ふて必らず〳〵忘れずに、お客の品評などする閑があるならば、お寺へ參つて能々御法を聽聞し、一日も早く未來の安心を決定して、而して苦海にある内ゝ樓主大事を忘れずに、朝夕身躰を厭ふて、目出度う年期を勤め上げ、微塵も不都合の無やうに、あゝこれも報謝の經營の一つ、うれで堅固な信心が出來たから、未來ゝ一緒にお淨土へ……ね……合點が行きまし た乎、これで言ひ遺すことゝおんにも無い、此の上は心丈夫に往生

し、死骸ハ萬行寺の御地内へ埋めて載くが何よりの樂しみ、お住持様お頼み申します、皆様お達者で、といふも哀れな斷末間、つく息吐く息荒き中にも、稱名の聲絶ゆることなく、聽ては聲さへおぼろげに、息の音次第に細り行きて、眠るが如く安き往生をぞ遂けける。

（六）

普賢菩薩ハ室の遊君と現じて衆生を導き給ひ、讃岐源太夫は岩鼻に往生して青蓮口より生

ず、扨も薩摩屋の遊女明月は、佛法信心の功德に依て目出度往生を遂げれば、死骸ハ彼れが遺言に任せ萬行寺境内に葬むりて、忌日命日の問吊ひもいと叮嚀に執行ひしが、不思議や數月を出でずして其墓より一莖の青蓮生出で、日を經るに從ふて花葉漸やく繁茂し、宛から地中より生出でしものに異ならず、斯くと聞傳へて諸方より參詣する群集、日々萬行寺の境内に溢るゝばかり、人々皆な不思議〳〵と言囃して、果ては市中擧つての評判と

なり、到る所蓮の話しからざるはなかりき。青蓮の噂さ次第〳〵に高まりて遂に領主の役人の聲く所となりたりしが、役人ハ唯冷笑ひて其事の虚かるを說き、更に信用せざりければ、見たる者ハ益ます本氣になり、偽りにあらずと說きて止まざるにぞ、役人も今は其儘に差置がたく、然らば是より萬行寺ヨ到りて、眞物歟偽物歟見屆け吳れんと、早速支度を調へて檢査の爲めに、墓ある場所へと出向きぬ。

斯くて領主の役人萬行寺に到り見れバ、果して明月の墓より一莖の青蓮生出たり、斯て不思議と早速命を下して墓を發き見るに(或ひハ正海法師之れを堀るとも云ふ)蓮の根明月の死骸の口より生じ居たりといふ。

うれより幾年月を經て、萬行寺十三世正賛師の時に至り、件の青蓮忽ち所在を失なひしが、不思議や師の室磯野氏、一夕幻〳〵の間に麗はしき女菩薩より、ゆくりなく一莖の青蓮を授かりしにぞ、是れ明月の墓に生ぜしもの

ならんと、打喜びし間もおく、曩に所在を失ひし所の青蓮復た忽ち現れ出たり。正贊師は恭うやしく此二蓮を櫃にして、大切に寶藏に秘め置きたり、世にいふ萬行寺の明月の蓮なるもの是れなり。

此蓮の外に明月の帶とて、今尚ほ萬行寺に存せりといふは、明月存生中彼の正海法師の厚き教誨に報ふる爲め、己が所持せる蜀紅錦の帶一筋を寄進したるとあり、此帶も亦彼の蓮と共に同寺に傳へり居れり。

斯て文政十年亥の春は、明月の二百五十回忌に相當せるを以て、柳町より其墓を起して且つ盛んなる法會を營み、時の住持萬行寺十七世釋曇龍師に碑銘を請ひ、後ち嘉永五年明月二百七十五回忌の時に及び、十八世釋龍城師之れを石に勒し、今尚ほ萬行寺の境内に「名娼明月墓」とて、苔の下露遥々餘波の色香掬みて、

參詣人の斷間なき、博多舊跡の一つの石碑、

朽せぬ三百年の春秋。

遊女明月 終

明治二十五年七月十七日印刷
明治二十五年七月十七日出版
定價金五錢

著作者　福岡縣筑前國福岡市大名町二十五番地寄留　高橋群稽

發行者　大阪市東區安土町四丁目三十八番屋敷　鈴木常松

專賣所　大阪市東區安土町四丁目十一番屋敷　積善館

專賣所　福岡縣福岡市博多中島町　積善館支店

印刷者　大阪市東區本町一丁目三十番屋敷　大阪國文社々員　松本貞三

版權登錄

版權所有

特51
54

遊女明月

国立国会図書館

019207-000-1

特51-54

遊女明月

宗硯/著

M25. 7

ABF-2798